

## 「憂国忌」に寄せて

志村 泰元 陸自65

屋騒動を連想させられる。三島らが日本刀を振りかざし営門を突破、警衛隊員を振り切つてドアを蹴破つて総監室へなだれ込んだ……のではない。規則どおりに総監と面会する手続きをとり前日には確認の電話をして、当日約束の時間に来隊、営門から総監室まで隊員に案内され総監に迎えられている。「事件」はその後のことである。この辺りは西村氏の著書の「参考文献」に紹介されている寺尾克美氏の『三島由紀夫事件の真相』に詳しく描かれている。なお、寺尾氏は総監部勤務の前は習志野の会計隊勤務であつた。

西村繁樹著『三島由紀夫と最後に会つた青年将校』を読んだ。内容はここに紹介するまでもないだろう。そして

『偕行』8月号「花だより」の『西村繁樹元防衛大教授を偲ぶ会』の開催を読んだ。西村氏が別世界のの人に思え、私如きが同窓の先輩であることが、恥ずかしく申し訳ない気がする。

「事件」について小さいが譲れないこだわりを私は持つている。「乱入」との表現と「乱入」と称する人やメディアに対するものである。

「乱入」から吉良邸討ち入りや池田

OBの中にさえ「乱入」を使う人がいる。高校時代の同級生有志を募り「市ヶ谷台ツアー」に参加した際、案内の幹部がそれらしい言い方をしたのでアドバイスした。「乱入」は使わないでもらいたい。また「乱入」でなかつたことを史実として伝えてもらいたい。

昭和42年5月に三島は空挺教育隊へ体験入隊した。私は基本降下課程の学生で学生長だった。課程主任と呼ばれ、「平岡公威さみたけ」という大変有名な人が一緒に訓練をするから云々と言われた。たまたま三島の本名を知っていた私は仰天したが、「わかりました」とだけ答え、指示通り、特別視や「無用の口外」をしないことにした。学生は私の他に幹部一人、レスキューの空曹二人、

空士長二人、後期教育を修了した団所属の2等陸士29人だった。「三島由紀夫を知っているか」と尋ねたところ、「名前だけは……」という者が2、3人だったのでそれ以上触れなかった。

3、4日間だったが教育隊の隊舎で三島と文字通りベッドを並べ、他の者達とともに何回か食卓を囲み、風呂に入った。ベッド脇で、食卓で、浴槽で、三島と四方山話をした。話の中には三島らしく奥深い下ネタもあった。三島が「学生が『いい眼』をしている」と言ったことと「精強な部隊はこうして作られるのだね」と言ったことが特に印象に残っている。こんな機会があったのに大変残念なことに三島の凄さを吸収する能力が私にはなかった。ただ「大東亜戦争肯定論」を凌ぐ大作が出るのではないか、というような予感があった。とにかく、これをきっかけに、この目で見た三島のナマの色々な姿を思い浮かべつつ、代表的な作品から読み始め、三島に関心を持つようになった。昭和45年のあの水曜日、代休をとっていた。出先で事件を知り勤務先の団3科へ電話した。すぐ科長(陸士59期)が替わって出た。「シムラか！ 今どこだ！ すぐ来い！」とのことで、タクシーで私服のまま駆け付けた。身分証明書を持っていなかったので警衛司令(勿論知っている隊員)にその旨話

して部屋へ駆け込んだ。科長は「おおかたか、安心した。代休だったな、帰っていいぞ」。私が時々三島のことを口にしていたので心配した由、オレにはそんな度胸も能力も信念もないのに、と思った。電話でのハイテンションと裏腹に2、3分で解放された。

私事ながら、長女が職場のお局であり二人の子持ちでもある。昭和45年生まれで年齢が事件からの経過年数を示す。半世紀経った。憂国忌の都度、どこからか乱入という言葉が流れて来て、「乱入」がイメージとともに史実として定着してしまうのではないかと気掛かりなのである。これが私のこだわりである。

余談のようで申し訳ないが三島の体験入隊に関してひとこと付け加える。

2等陸士を5個班に分け空自のレスキュー隊員がそれぞれ営内班長になった。同じ訓練生で心身の余裕が必ずしもあったわけではない中、訓練中に班員を激励することを含め、その役を完璧に果たしてくれた。班員達が「ハンチョー！」と実によく懐いていた。学生長たる私の出番はなかった。レスキュー隊員はそういう「何か」を持っていたのだと思う。

後年、一人が乗機の墜落(と記憶)で殉職した。